

## 近未来の小中高校・大学を考える

—愛知県の素晴らしい挑戦—

開倫塾

塾長 林明夫

Q：愛知県に視察に出かけたそうですね。

A：はい。理事を務める公益社団法人栃木県経済同友会の社会貢献活動推進委員会の一員として、9月19日から3日間、愛知県で5つの教育機関を視察してきました。

Q：どのような教育機関を視察したのですか。

A：(1) 第一は、「瀬戸市立にじの丘学園」です。瀬戸市の中心市街地の少子化問題を解決するため、5つの小学校と2つの中学校を一つに大統合した小中一貫校です。同じ校舎の中に小学1年生から中学3年生まで9学年の児童・生徒が眼を輝かせて学ぶ姿は感動的でした。教育環境が整ったためか、人口とともに入学希望者が増え続けているようです。



(2) 第二は、名古屋市守山区にある「愛知県立守山高等学校」です。中学生の時に不登校であった生徒も対象とした「単位制高校」です。高校1年生の1学期から高校3年生まで、よく考え抜かれ一貫したキャリア教育が行われています。高1生の1学期という早い時期から「職場見学」と大学・専門学校などの「学校見学」が行われ、高校卒業後の進路をイメージしやすくさせています。高1生の2学期に、普通科ではありますが、年間10日間のインターンシップに全員が参加。高2生から進学コースと企業連携コース(就職コース)に分かれ、将来を見据えた教育を行っています。普通科高校で高1生全員が10日間のインターンシップを行っている高校は、全国のキャリア教育のモデル校といえます。インターンシップ先に就職する生徒も多いようです。

(3) 第三は、名古屋市千種区星が丘にある「愛知県立愛知総合工科高等学校」です。工業県である愛知県最大の工業高校。高校卒業後、2年間の専攻科を終了すると、高等工業専門学校(高専)と同様、4年制大学に編入できるという素晴らしいチャレンジを果たしました。名古屋の名門大学、名城大学と提携した成果とお聞きしています。



○全国各地の工業高校・商業高校・農業高校など実業高校は、近くの大学と提携して、大学3年次に編入可能な2年制の専攻コースを設置することを提言いたします。その素晴らしいモデルが、愛知県立愛知総合工科高等学校の専攻コースです。

(4) 第四は、名古屋市熱田区沢下町8-5、愛知私学会館東館にある、一般社団法人「アスパシ」です。20年以上にわたり、小学生から大学生まであらゆる段階も含め若者の支援に取り組んできたキャリア教育支援チーム。特に、高校生のインターンシップ先を学校に紹介し、マッチングを図ることで、愛知県の高校生のインターンシップの大きな推進役になっていま

す。大学生や専門学校生のインターンシップよりもはるかに短い、1～3日間のインターンシップで、高校生の進路についての意識が大幅に変化、行動変容を促すチャレンジには、頭が下がります。

○全国の普通科高校生全員が、インターンシップを経験することで、高校で学ぶ意味、大学・専門学校に進学することを考える大切な契機となると確信します。トップ校や難関高校であれば、課題発見、課題発見型の「探究型インターンシップ」への挑戦も極めて教育効果が高く、又、大学への志望理由書の執筆や入学試験での集団討論にも大いに役立つと確信します。



(5) 第五は、愛知県長久手市茨ヶ廻間にある「愛知県立大学」です。愛知県立大学は良質の研究とそれに裏打ちされた良質の大学教育を行い、卒業生の大半が愛知県内に就職し、地元の経済、地域社会を支えています。なぜ、卒業生の大半が愛知県内に就職するのか。大学の就職支援のためのきめ細かなキャリア教育が充実しているのと同時に、魅力あふれる就職先が愛知県内にはキラ星のごとく存在。愛知県以外に就職する必要がないためと思われます。例えば、愛知県立大学の外国語学部で英語、独語、仏語、中国語、スペイン語、ポルトガル語などを学び、世界で活躍を希望する学生は、わざわざ首都圏や大阪に行かなくても愛知県内の企業に就職すれば、外国勤務の夢が果たせるからです。

○地元企業や地域の団体に、高校生・大学生・専門学校生・大学院生・留学生が就職してくれないと嘆く前にまずは、若者が就職するに値する魅力ある企業、魅力ある地域づくりを、全社一丸となり、又、地域全体が力を合わせて行うべきであると、愛知県を3日間訪問し、痛感いたしました。



Q：学習塾・予備校・私立学校の経営幹部の先生方にお伝えしたいことは何ですか。

A：(1) 「自己責任」、「自助努力」、「あきらめたらおしまい」、「自分の未来は自分で切り開く」ということです。

(2) 高校や大学・専門学校・大学院の卒業生の大半が地元愛知県に就職するという今日の実況をつくったのは、トヨタ自動車を中心に愛知県の地元企業が一丸となって、この100年間努力を重ねてきた結果と考えます。



(3) 「積小為大(せきしょういだい)」、小さいことでも一つ一つ積み上げ、志を成し為げる。小さいチャレンジを積み上げ、企業・地域を変身させることの大切さを愛知県で学ばせて頂きました。ありがとうございました。

Q：最後に一言どうぞ。

A：僭越ながら、今月も先生方がお読みになれば必ずお役に立つ本をご紹介します。

(1) 1冊目は、ハナー・ウルファーツ編著 OECD 教育研究革新センター編、西村美由起訳「知識専門職としての教師—教授学的知識の国際比較研究に向けて」明石書店、2023年7月6日

刊です。英語の書名は、「Teaching as a Knowledge Profession」です。「教師」「先生」という「職業」は、「知識専門職(Knowledge Profession)」である、「洗練された知識やスキルも必要とする」、「教師はすべての職業の母である」という OECD の見解は、本質を突いたものです。



(2) 2 冊目は、政治学者 宇野重規著「近代日本の『知』を考える。西と東との往来」ミネルヴァ書房、2023 年 1 月 30 日刊です。「名著から学ぶ日本の教養(リベラルアーツ)」として日本の西と東の代表的知識人を紹介、秋から冬の読書案内としては最もふさわしい好著です。

(3) 3 冊目は、スペイン語学習者、待望のテキスト、菅原昭江著「極める！スペイン語の語彙・表現ドリル」白水社、2023 年 10 月 5 日刊です。これ 1 冊で 4000 語以上学べます。同著「極めるシリーズ」の「スペイン語の基本文法ドリル」「スペイン語の動詞ドリル」「スペイン語の接続法ドリル」(いずれも白水社刊)と一緒に、何年かかけてじっくり取り組めば、スペイン語は、A<sub>1</sub> ~ B<sub>2</sub> のレベルまで確実に身に着きます。英語のテキストや問題集など、本気で教材を作るときに参考になるのが、この 4 冊の「極めるシリーズ」です。是非、ご参考にしてください。

(4) 4 冊目は、読売新聞 NY 特派員を経て経済部記者 小林泰明著「国家は巨大 IT に勝てるのか」新潮新書、新潮社、2023 年 9 月 20 日刊です。巨大 IT 企業(GAFA、グーグル、アップル、フェイスブック、アマゾン)対アメリカという国家が繰り広げる「新・パワーゲーム」の影響は、米国対中国という国家の覇権争いだけでなく、日本や世界中のスマホの利用者にも大きな影響を与える。1998 年ころ、民営化の勉強をするため世界銀行研究所とハーバード大学大学院の短期集中コースを修了したが、内容は、競争政策(独禁法)の授業が大半で、どのようにしたら巨大企業(民営化後の国家独占事業体)から消費者を守れるか、透明性(トランスペアレンシー)と説明責任(アカウントビリティ)、腐敗防止(アンティ・コラプション)でした。25 年前の米国での勉強を思い出せる本書の内容でした。是非、御一読を。



(5) 5 冊目は、今から 1000 年前に書かれた「紫式部日記」岩波文庫、岩波書店 1964 年 11 月 16 日刊です。2024 年 1 月からの NHK 大河ドラマが始まる前に、「紫式部」のこの日記を、脚注や補注を見ながらゆっくり音読。事前勉強するのも趣(おもむき)深いと考えます。

2023 年 10 月 1 日記

